

日本人学校での英語教育実践を通して

前リアド日本人学校 教諭

岩内町立岩内第一中学校 教諭 中 島 次 郎

キーワード：小学校での英語教育，現地理解，国際理解教育

1. はじめに

サウジアラビア王国の首都リヤド（Riyadhはリヤドと和訳されることが多いが日本人学校の名称はリアド日本人学校）は、近年、いわゆるオイルマネーにより、急速に発展している近代都市である。その人口は450万人とも言われ、その成長ぶりから正確なところは誰も把握できないのではないかと思えた程だ。巨大なショッピングセンター、外国人居住区等の集合住宅やホテル等が次々と建設され、また人口増加に伴う様々なサービス業も成長しているため、その労働力として、近隣の中東諸国をはじめ、インドやパキスタン、そして特に東南アジアから、リヤド市の人口の4割を占めるとも言われる外国人労働者が急激に流入、増加している。



サウジアラビアの公用語はアラビア語がそれとして定められているが、生活するにあたって、私たち外国人が使用する言語は、公用語のアラビア語よりも共通語としての英語が欠かすことができない。もちろん、アラビア語圏の人たち同士で話をするときにはアラビア語が使用され、アラビア語しか話せない人も少なくない。そのため、私たち派遣教員の生活を考えれば、家庭や職場で話す母国語（日本語）、生活で話す英語、親睦で話すアラビア語といった具合だ。

リヤドで生活する日本人学校の児童・生徒にとって、英語に触れる機会は、間違いなく日常的に身の回りに存在し、授業としての英語を考えると、その位置付けは、ねらいというよりは必要・当然に近い。世界各地に展開している日本人学校小学部のカリキュラムに「英語」もしくは「英会話」の時間がない日本人学校はその性格上、皆無であると思われる。実際に英会話の授業を担当するということでも迷ったことはその根底からである。「どう授業を展開していくか」ということである。

2. 小学校における英語教育実践の目標

これまでは、国内で中学生を対象に英語の授業を展開してきたわけだが、それは教科書があり、教えるべき項目（単語や文法）があり、それに沿ったテストがあり、最終的には高校入試があった。しかし、リアド日本人学校での対象は、日常的に英語を用いてコミュニケーションを行っている小学生であり（中学部も併設されているが、絶対数は小学部の方が多い）、教科書もなければ、教えるべき項目もない。そのような学習者を対象としてイメージし、赴任が決定してからの慌ただしくも時間の少ない中で心に決めたことは、

- ・興味・関心を失わないような言語活動する。
- ・教える言語材料に対して、年間を通した見通しを持つ。
- ・英語を用い、極めて自然に簡単な表現ができるようにする。

ということである。設定理由として、近い将来に導入される可能性が低い小学校への英語教育を考えたとき、これらの目標も国内の小学生に当てはまると考えたからである。興味・関心を損なわず、見通しを持って、自然に英語を扱えるようにするという目標を立てた。年間の見通しということでは、手探りの状態であったが、試行錯誤し、実践してみた。

3. 小学校における英語教育実践

実際に実践してみて、小学部の児童は、聴いて理解するという点、意思伝達も含め表現するという点ではレベルが高く、モチベーションも高い。参加態度も積極的である。ただ文字の扱いや文法という点ではルールを外れていることが多く、修正が必要であるが、間違ふということを恐れている児童も少なくないので、修正もそこそこに、興味・感心を大切に授業を展開した。以下の通りである。

1 学期

- ・フォニックス（アルファベットの扱い。各アルファベットの音を扱った）
- ・聞き取り（絵とCDを用いての聞き取り。どんな場面の会話なのかを予想）
- ・身の回りの単語（絵を用いての発音の練習。カルタを用いてのゲーム）
- ・英語の歌（毎月の歌。意味よりも音の楽しさ、発音のスムーズさを重視した）

2 学期

- ・Be動詞を用いた表現（自分を表現、相手への質問、会話に重点）
- ・一般動詞を用いた表現（使用頻度の高い動詞を学習。会話を重視）
- ・インタビューゲーム（上記の2つの混合を意識した。動詞の使い分け）
- ・疑問詞、助動詞（会話の幅を広げる要素としての扱い）

3 学期

- ・英文の読み（文を用い、読みに取り組んだ。絵を用い、状況を表すことに取り組んだ）
- ・簡単な自己表現（絵や文を用いて状況を捉え、その状況を自分に置き換えて会話を行った）

フォニックスについては、有効であったと思われる。「アルファベットには名前と音がある」というのは小学生にとって、漠然と分かっている児童もいたが、彼らのほとんどは、いわゆるアルファベットの歌で「名前」は知っているが、それぞれが持っている「音」については頭の中でわかっていない児童が多い。というのは、日本語の平仮名は表音文字であり、日本語と英語の違いに気付くことで、文字と音の相互関係の理解が容易になる児童も少なかった。

聞き取りについては、児童の能力の高さに驚いた。まず、聞いてほしいの意味は理解しているし、分からない単語があっても、知っている単語だけで意味を推測できる。そのあとで、どう答えていいのかが文法的にもばらばらで非文法的な返答が多いが、これまで教えてきた中学生よりもその柔軟な耳に感心させられた。

英語の歌も1学期は毎月取り組んだが、結局は歌詞カードを配っても読むのも難しいので、音で覚えるという感じだったが、英語独特のストレスやリンキング、落ちる音などをリズムの中で練習できる利点がある。ただ月毎というより、年間で取り扱う歌を決めて取り組みたいと感じた。

2学期に入り、意識させないで文法を取り扱うことに挑戦してみた。中学校では、前後を結びつけて、系統的に文法を頭でノートで整理し、構築して行くことが可能だが（そこには文法用語など日本語を介しての正に第2言語としての習得がある）、日本語もそれほど語彙やそれに伴うイメージが豊富ではない児童にとってはBe動詞とか一般動詞とか、はたまた疑問詞や助動詞といった説明は、早くに英語嫌いを作る可能性もある。そういう意味で挑戦

ではあったが、自分のことを表現したり、相手に質問してみたいと意欲を大切に進めることで一定の効果はあったように思われる。常にたくさんの文法的な間違いはあるけれども、繰り返し、訂正・練習していくことで、自然と身に付いていくかもしれないという手応えはあった。

3学期になり、文字を文として取り扱って行くことに決めた。というのは、いくつか理由はあるが、結局、教師側として中学の英語教育が目に入ってしまう、その先取りを考えてしまったということにある。また、リアド日本人学校は（他の日本人学校でもそうだと思うが）実用英語検定試験（英検）を教育課程の一環として取り入れており、小学校低学年でも5級取得者は珍しくなく、高学年にもなると、2級を取得する児童もいるという実態もあるからだ。当然、5級でも中学校1年生終了レベルの文法が文字として取り扱われているわけで、英文の読みも取り組まざるを得なくなったということである。

4. 実践から浮かび上がった課題

初めての小学校における英語教育の実践で課題も明らかになってきた。まずは、扱う項目をどうするかということだ。単語を取り上げるにしても、表現を取り上げるにしてもそのある程度の範囲が必要になってくる。例えば、「身の回りのもの」や「自分のことを表現する動詞」、「相対する形容詞」、「頻度を表す副詞」などの単語、表現としては「一日の生活で使う表現」、「初対面の人とのあいさつ」などが考えられる。しっかりとした範囲を決定し、扱う言語教材をまとめておく必要があるだろう。



次に教材の選定・使い方も重要だ。教科書があるわけではないので、通常の授業となれば、やはり児童も意欲・興味・関心といった面で、どうしても飽きてくる場面があると言わざるを得ない。そこで、CDにしても、絵やカードにしても、教科書やワークシートのような存在を効果的に使っていく必要がある。特に音声教材、そして視覚教材はいくら英会話の授業とは言っても、母国語話者が教師である教室においては重要な教材である。

そして、以上述べたように「取り扱う言語教材（単語や表現）の範囲」を決め、「それに適する視聴覚教材」を揃えても、一年間を通して、「何をいつ、どうやって教えていくかという見通し（当然であるが年間計画に当たるもの）」が必要不可欠になってくるのが明確になった。一方でこのように具体的に言語教材を決定すれば、気を付けないと、これまで国内で実践してきた中学校での英語実践と何ら変わらないものに陥りそうになる。根底に「興味・関心を損なうことなく、自然と英語を用いて簡単な表現ができるようにすること」を置いて、かつ自分のこの一年間を見直した実践を積み重ねていきたいと改めて感じた。

課題はこれだけではない。児童の英語能力の差が実は歴然と存在する。日本人学校の同じクラスには、海外生活が初めてで入学して間もない1年生もいれば、就学以前から現地で生活し、英語中心のプレスクール（幼稚園）に通い、英会話のクラスを一年間積んだ2年生もいる。英語の授業を受けた経験がない日本の学校から転校して間もない3年生もいれば、英検準2級に合格した5年生も同じクラスだ。少人数であるがゆえに、会話の機会は増えるが、一方で個々人の差がはっきり見えてしまうという点も見落とせない。この学力差が、苦手＝英語嫌いにつながる可能性も否定できない。またこの中でも触れたが「実用英語検定試験（英検）」に合格させてあげたいというジレンマもある。年間3回、教育の一環として組み込まれていたため、児童英検・英検を必ず受ける環境にある。受けるからには子どもであるから合格したいし、良い結果を残したいと思っている。その期待にも応えてあげたいし、英検のための授業にならないようにバランスを取りながら楽しい授業でありたいと願っている。

小学校への英語教育の意図がどんなところにあるのかを考え、子どもたちがどんな英語能力や国際理解力を身に

つけ、中等教育、高等教育に取り込まれていくのが望ましいのかを見極めたい。

5. 国際理解教育としての英語教育

「将来、外国には行かないから英語は勉強しなくてもいいんです」とは英語の興味・関心を損なってしまった中学生徒が口にするセリフだが、案外正解からそれほど遠くない。裏返せば、「日本国内には英語を必要とする環境がない」と言っているのと同じである。では、日本の子どもたちにとって、英語を勉強する必要性とは何なのか。国際理解（教育）である。世の中の現状を知り、最初は物事の善し悪しで判断しがちの差異に、何故そうなのか、その背景を考えることで、物事の善し悪しを超えた違いに気付き、認めることである。その有効な手段に英語教育は成り得ると考えられている。確認しておきたいことは、文部科学省が小学校学習指導要領の解説において、外国語活動の目標を掲げている。

- 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

当然ながら、小学校に英語教育の時間を設置するということは、英語を実際に用いて、コミュニケーションの能力を初等教育から図ろうとすることだが、小学校において大切なことは、言語や文化について理解を深めることであり、この意識なしに、ただ英語教育だけを導入しようとするれば、前述したような現在と同じ問題を抱えてしまうと思う。その上で、英語活動を行っていく必要を訴えており、具体的に子どもたちが意識できるかどうかは別にしても、言語材料を扱う教師側には常に求められるものである。広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること、それを自分の中の日本にフィードバックすることで、日本を見つめ直す機会とし、自己の確立を図ることにつながっていく。

日本人学校で児童を対象に英語教育を実践したことで、このことを実感したことも事実だ。特に、サウジアラビアという大きく違う文化や生活の中で、英語教育を通して、日本を感じたことは不思議で有意義な体験だった。

6. おわりに

この赴任期間を通して、自分の専門分野である英語教育に取り組む機会を得たことをうれしく思う。小学校における外国語（英語科）教育の導入が平成22年実施する方向で、さらにリアド日本人学校小学部にて、英会話の授業を実践できたことは貴重な体験だった。実践してみて、手応えもあり、今までの授業を振り返ることも多い。また、ここでは触れられなかったが、第2言語習得における母国語の役割について、思いを巡らすこともあった。そのことから、第2言語のどういう面が、子どもたちにとって魅力的であるのかを考えることが、意欲や関心につながるのではないかということも分かった。また、当然、世界各地それぞれの在外教育施設には、それぞれの現状があり、英語教育だけに限ってもそれぞれの実践があるということも自然と考えさせられた。

帰国してからの実践に、さらに試行錯誤を重ね、国際理解教育とともに、子どもたちのために、意欲や動機のきっかけになる授業を展開できればと思う。